プロジェクトQ・第22章

若いクァルテット、モーツァルトに挑戦する

モーツァルト：ハイドン・セット全曲演奏会
〈第1部〉

2025年3月30日（日）13:00開演
会場：TCM ホール（東京音楽大学　中目黒・代官山キャンパス）

主催：プロジェクトQ実行委員会
助成：公益財団法人 朝日新聞文化財団 / 公益財団法人 野村財団
協力：学校法人 東京音楽大学 / 公益財団法人 日本音楽財団(公益財団法人 日本財団助成事業)
制作：テレビマンユニオン

プロジェクトQ・第22章
～若いクァルテット、モーツァルトに挑戦する
モーツァルト：ハイドン・セット全曲演奏会〈第1部〉

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756-1791）作曲

弦楽四重奏曲 第 14 番 ト長調 K. 387「春」(1782)

I. Allegro vivace assai
II. Menuetto: Allegro
III. Andante cantabile
IV. Molto allegro

クァルテット・ベアトリーチェ　Quartet Beatrice
西岡舞桜／箕浦 彩（ヴァイオリン）　遠藤望名（ヴィオラ）森 朝美（チェロ）

2024 年 5 月、桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学及び桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコースに在学中の 4 人により結成。ベアトリーチェとはイタリア語で「幸せをもたらす者」という意味。現在、磯村和英、池田菊衛に師事。

✍program note

今回「春」に挑戦するにあたって、モーツァルト特有の千変万化していく表情を、クァルテットとして如何に繊細に表現できるかを中心に試行錯誤しながら練習に取り組んできました。強弱が絶え間なく変化していく本作品を通して、一つの強弱記号に対して音量だけではなく、弓のスピードや圧力、ヴィブラートのかけ具合など、多様なアプローチがあることを学びました。思い通りの表現が出来ずに道に迷うこともありましたが、先生方の力を借りながら、少しずつ自分たちが思い描く演奏へと構築していくことができました。

第 1 楽章はハイドン・セット全体を通しての 1 楽章でもあり、名前の通りまさに「春」の到来を表現しているかのような、草木の芽吹きや生命の躍動が感じられる幕開けとなっています。第 2 楽章は、一音ごとに強弱が 180 度変化した音形がひとつのモチーフとして全体に散りばめられており、モーツァルトのユーモア溢れる一面が垣間見えます。第 3 楽章は、儚さや美しさ、静けさなどが全て凝縮されていながらも、純粋な曲調をもつハ長調で素朴なメロディで歌い上げられます。第 4 楽章は、モーツァルトの交響曲「ジュピター」を彷彿させるメロディを積み重ねて発展させていくフーガと呼ばれる形で構築されています。また、主に曲の第 1 楽章で用いられる曲構成の決まった枠組みであるソナタ形式を、第 1 楽章だけでなく第 4 楽章にも組み込むという新たな試みをしています。

皆様の春の幕開けとなるような演奏ができるように精一杯頑張りますので、ぜひお聴きください。

クァルテット・ベアトリーチェ

弦楽四重奏曲 第 15 番 ニ短調 K. 421(1783)

I. Allegro
II. Andante
III. Menuetto: (Allegretto)
IV. Allegro ma non troppo – Più Allegro

クァルテット風雅　Quartet Fugue
落合真子／小西健太郎（ヴァイオリン） 川邉宗一郎（ヴィオラ） 松谷壮一郎（チェロ）

2024 年に 2001 年生まれの 4 人によって結成。第 13 回秋吉台音楽コンクール第 1 位、併せてベートーヴェン賞、山口県知事賞を受賞。2024 年キジアーナ音楽院夏期アカデミーにてクライヴ・グリーンスミスのクラスに全額奨学金を得て参加。2024 年度第 34 回松尾学術振興財団より助成を受ける。第 8 期サントリーホール室内楽アカデミーフェロー。原田幸一郎、池田菊衛、山崎伸子、吉田有紀子に師事。

✍program note

モーツァルトが 1783 年に作曲した「ハイドン・セット」6 曲のうちの 1 つであり、その中で唯一の短調作品です。モーツァルトの短調作品には長調の作品と比べて激しい感情のうねりが込められていますが、この曲もまた深い悲しみとその中にある美しさが見事に融合しています。 この作品が書かれたのは、モーツァルトの妻コンスタンツェが出産した時期だったと言われています。ある逸話によると、第 4 楽章の冒頭のメロディは、彼女の陣痛のうめき声を音楽にしたものだとか。本当かどうかはさておき、確かにこの曲の中には、苦しみ、葛藤、そして最後には希望の光が垣間見えます。モーツァルトならではの、悲しみの中にも優雅さを忘れない天才的なバランス感覚が光る作品です。どうぞお楽しみください。

クァルテット風雅

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

弦楽四重奏曲 第 16 番 変ホ長調 K. 428(1783)

I. Allegro non troppo
II. Andante con moto
III. Menuetto: Allegro
IV. Allegro Vivace

ルシェリア・クァルテット　Le Cherien Quartet
大屋 響／谷本沙綾（ヴァイオリン） 山之内真梨（ヴィオラ） 村上真璃南（チェロ）

2023 年、プロジェクト Q・第 21 章の参加を機に結成する。メンバーは相愛高等学校ならびに相愛大学卒業生、京都市立芸術大学卒業生から成る。「ルシェリア」は、フランス語で Le lien「絆、縁」Cheri「大切な人、愛する人」の 2 つが合わさった言葉で、音楽を共に作り上げる仲間との絆、音楽を通して出逢えた人々とのご縁を大切にしたいという想いを込めて名付けた。小栗まち絵、大谷玲子、上森祥平に師事。

✍program note

第 16 番は、第 15 番とほぼ同時期に作曲され、動機の扱いや半音階を駆使した斬新な和声、各楽章の多様な表情など、「ハイドン・セット」の中でも特に実験的な作品とされています。そのため、演奏される機会はあまり多くありませんが、ロマン派の先駆けとも言える濃密な音楽は、モーツァルトの才能が存分に発揮された名作です。特に、音楽学者アンナ・アマーリエ・アーベルト（1906～1996）が「トリスタンの響き」と称賛した第 2 楽章の夢のような音楽の世界は、非常に印象深いものがあります。 楽譜には最低限のダイナミクスしか書かれていないモーツァルトの作品ですが、強さ弱さで表現するのではなく、空間を意識した立体的な音楽作りを心がけました。そして、単なる美しさやユーモアだけではなく、突然の転調や不協和音を通じて、暗く影のある側面や人間の複雑な感情が表現されていることに気付きました。その対比やぶつかり合いを楽しむようにという先生の言葉が印象に残っています。音楽の奥にある感情を表現することが、表面的な美しさだけでなく深みのある演奏へとつながるのではないかと感じました。

ご指導いただいた先生方からのアドバイスや楽譜を通して得たヒントをもとに試行錯誤を重ね、モーツァルトの音楽を追求してきました。私たちが感じ得たこの作品の魅力を最大限に表現できたらと思います。

ルシェリア・クァルテット

【マスタークラス（2024 年）】 会場：東京音楽大学（池袋キャンパス）
① 9 月 26 日（木）　講師：ヘンシェル・クァルテット
② 10 月 28 日（月）　講師：クァルテット・アルモニコ
③ 11 月 9 日（土）　講師：今井信子（ヴィオラ） 小栗まち絵（ヴァイオリン）
④ 11 月 23 日（土）　講師：クライヴ・ブラウン（音楽学）
⑤ 11 月 29 日（金）　講師：原田幸一郎（ヴァイオリン、指揮）＆原田禎夫（チェロ）
【トライアル・コンサート】 会場：TCM ホール（東京音楽大学　中目黒・代官山キャンパス）
2 月 24 日（月・祝）、2 月 25 日（火）、3 月 14 日（金）

アドヴァイザー：原田幸一郎

facebook

プロジェクトQ実行委員会
原田幸一郎（実行委員長） 今井信子　小栗まち絵　川崎雅夫　菅沼準二　原田禎夫

東京都渋谷区神宮前 5-53-67 コスモス青山 South 棟 テレビマンユニオン　事業部内 Tel：03-6418-8617